

第5回沖縄宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会

応答① 外間さんの発題を受けて

岡田 仁

外間永二さんのヤマト人、ヤマトの教会に対する問いかけを前にしてこの数年間どう応答すべきか、自分のなかで格闘し、未だ答えらしき答え、返すべき言葉がみつからずにいます。沖縄からの声をただ聴かせていただくしかない十年でした。外間さんはじめ下門さんたちがそれでもこうしてこの場に一緒に居てくださって、わたしたちヤマト人に向かって真実な思いを語り続けてくださっていることは大変ありがたく、一つひとつの言葉を真摯に受け止める者でありたいのです。不十分であることを自認しつつ、わたしもいまから真実な思いを語ります。

まず、「植民者ヤマト」の問題を、長い間「被植民」の側から指摘されて問われ続けている現実、わたしを含むヤマト人がいまだに何一つ主体的に責任をもって沖縄の状況を解決できていない罪を、神の前に懺悔し悔改めなければなりません。しかし、かつて「問われる」側でしかなかったわたし自身が、そこから「自らを深く問う者」へと変えられてきたこともまた事実です。

十数年前にこの研修会の準備のためにわたしは沖縄の方々に手紙と電話で連絡をとりました。ある牧師からは、「お前たちヤマト人は醜い。汚くて醜悪なお前とはこれ以上話したくない」と吐き捨てるようにいわれました。人から直接「汚い人間、醜い存在」といわれたのはこの時が初めてで、今もこの言葉が刃のように胸に突き刺さったまま抜けない状態です。饒平名長秀牧師からは「40年以上もヤマトの教会の学習のために協力してきたが、沖縄の状況は何も変わらないどころか悪化している。自分たちは疲れ切っている。これ以上ヤマト人の消耗材にはなりたくない」といわれました。電話でしたが各々3時間近くわたしに発せられた怒りの言葉が今も耳に残っています。平良修牧師からは、沖縄戦の教訓、憲法九条が沖縄を除外することで機能してきたこと、ヤマトと沖縄の間にある差別と不正義の現状など多くの問題を提起されました。最初の沖宣研理事会で平良牧師は、「国内植民地」をこの研修会のメインテーマにすべきだ。ただ「学びました」で終わらせず、沖縄の問いに対して富坂として言葉で返してほしい、と提言

されました。しかし当時（2012年）わたしはその言葉に激しく動揺し、己れ自身がいかに無知であり、無自覚であったかを嫌というほど思い知らされます。

その後も双方で話し合いを続け、もし沖宣研が富坂と研修をともに実施するのであれば、「合同」ではなく「共同」でしかやるつもりはない、この点だけは絶対に譲れないと。饒平名牧師、平良牧師、友寄牧師、神谷牧師は、「醜い」という言葉をわたしにはおっしゃらなかった。しかし、「＜合同＞の名のもとに植民地支配が過去においてだけでなく、今も行われている現状を直視し、無意識にこれに加担しているヤマト人であることを自覚せよ」、つまり、歴史的構造的にいまも植民地支配を続けているヤマトの教会・キリスト者が、被植民である沖縄の教会・キリスト者と一緒に研修をするとはどういうことなのかを、自分の事柄として目を覚まして考えよ、ということであったと思うのです。

「合同」の名のもとに何かを行うとき、もともと存在していた大きな問題や異和、壁を勝手に壊して、何か一つにでもなっているかのような錯覚に陥ることがあります。それぞれが長年抱えてきた違いや個性の壁を「合同」の名のもとに崩して、自分たちの領域に入り込むなよ、と。けれども、そういう合同の形ではなく、異和と壁をもつ者同士の「共同」研修を互いに目指すわけだから、せめて教会の間でだけは、植民地支配をこれ以上強要するな、教会の名のもとに同化政策をするな、という警告、戒めではなかったかと思うのです。

ですから、わたしたちがここで目指す「共同」は、パンフレットの「共同研修会の目標」にあるように、「聖書に記された、神と神の民の歩みを想起しながら、かつては日本の植民地とされ、いま日本の植民地的状態にある沖縄の歴史と文化を共に学び、沖縄における基地の現実を見据え、平和への思いを分かち合いながら、今、わたしたちに語りかけられている神の言葉、わたしたちが取りつぐべき神の言葉を聴く。そのことをとおして、わたしたちが世界に対して、どのように仕えるのか（宣教）を共に探りながら、神の国の徴となる教会を形成する勇気と希望を共に養っていく」（下線部は、2023年2月21日第5回共同研修会の分団で平良修牧師が修正・加筆された箇所）。このことを「共同」で目指す研修会がようやく2013年2月に始まりました。

「合同」の名のもとに行われる植民地支配（非人間化）や「同化」ではなく、そ

それぞれの壁や違いを尊重しながら、共同で、聖書を読み、学び、祈り合う。対話の目的は、一致というよりはむしろ、対話することによって、既成の価値観や意識、生き方を自ら吟味し、深く問うところにあります。どちらかがどちらかに強制的に同意させたり、片方に同化することではない。既にキリストの一つのからだなる教会が根底にあって、異なる国や地域に立つ個々の教会が存在し、キリストの十字架の愛を土台にして繋がっていると福音信仰に立たない限り、共同作業はできないのです。教団内の個々の教会あるいは各教派の教会がつながり、一つになって（国名を冠とする「日本××教会」、「韓国〇〇教会」、「ドイツ△△教会」など各教会が「合同」して）一致をはかる方向性は聖書でもエキュメニズムでもありません。むしろその逆だといえます。平和の主イエス・キリストの一つのからだなる教会がまず根底にあって、その土台の上に世界に個々の教派、個々の教会が存在しているわけですから、主の導きに信頼し、互いの異和を尊重しつつ、「共同」あるいは協働する。これが聖書的な教会理解なのでしょう。もっといえば、エキュメニズムとは、「超教派」「宗教間対話」という意味をふまえつつ、武力や軍事力を断固として破棄する非暴力・減暴力と平和主義の祈りと闘いです。そのことを、この沖縄での共同研修会においてわたし自身が学んできました。

日本基督教団と沖縄キリスト教団の詳細な歴史と現状については、第4回共同研修会（前回・2019年）での戒能信生牧師のご講演を参照ください。『旧沖縄キリスト教団第二世代牧師懇談会会議録』（2016年）によれば、「日本基督教団の教会は、自らの歴史に対する反省がない。歴史において明らかにされている日本の問題、自分たち自身の問題、要するに日本人の問題としてある自分自身の問題を認めないし受け止めることをしない感性だ」（P238）とあり、さらに「教団は国家神道によって組織された教会であった。その結果、聖書の福音に反する教会になってしまった。教団は、存在そのものにおいて神の前で罪を犯したのである。罪を悔改めて戦後、解散すべきであったにもかかわらず、その判断も決断もないまま戦後も継続した。そして、沖縄キリスト教団を〈合同〉の名のもとにのみ込んだ」（P302）。「聖書の歴史はイスラエルの罪の歴史の記録だ」（P308）とあります。聖書には、人間の悪、醜さ、汚さ、呪い、憎しみの記述が満ちています。にもかかわらず、そういったおぞましい人間の醜い現実をわたしたちは意図的に避け、美しく読み替えてきたのではないのでしょうか。旧約聖書の歴史書は、イスラエルの民による侵略、破壊、虐殺を語ってはいるが、自らを加害者とみなす視点は殆ど

書かれていない。そこに加害者意識が生まれないのは、それが神による命令と受け止められているからです（石田、26-27頁）。

神学がキリスト信仰の自己吟味・検証であるならば、「行為は間違っていたが、信仰は正しかった」とする信仰と行為二元論に立つ姿勢、自分の組織を守る自己保身の醜い姿を神の前にさらけ出し、悔改めるしかありません。真の奉仕者（ディアコノス）である主イエスは、人間の奴隷、僕として仕え（マルコ10:45）、わたしたちの尻拭いをされ、泥をかぶりました。ディアコニア（奉仕）の「ディア」とは「～を通する」、「コニア」とは「塵や埃」をさします。美しく装飾されたところからではなく、むしろドロドロとした醜悪なところをくぐりぬけて初めて生まれてくるものが「神学」だとすれば、わたしたちもまた自らの醜い現実の姿と向き合う（塵の中を通る）なかでしか、真の意味において神と隣人に仕えることはできないのでしょうか（岡田、239-265頁）。

かつて韓国の詩人金芝河は、「醜は対立の産物であり、社会的暴力の産物である。・・・醜の芸術は現実に対する挑戦、すなわち事実の醜に対する芸術的醜での挑戦」であり、「現実批判の芸術」、「支配的文明の美学に対する挑戦」であると語りました（池、107-111頁）。金芝河のいう「醜」とヤマト人の「醜」とでは文脈が異なりますので慎重な検証を要しますが、自分自身の歴史的・現在的「立ち位置」をはじめ、16世紀以降の東アジアにおける琉球とヤマト、日本国のなかの沖縄（人）とヤマト（非沖縄人）を知るために、また、いかにすれば植民者・抑圧者からわたし自身が解放されるのかを考えるために、それこそ「醜」の問題をアジアの文脈のなかで神学的に問うことがヤマト人キリスト者の自己吟味と抑圧・加害からの解放へとつながるのではないのでしょうか。

4回にわたる共同研修会で富坂やわたし自身はどう変わったのかについて述べる前に、そもそも富坂がどのような歴史をもつ団体であるかをここ数年、共同研修会をとおして改めて問われてきました。富坂の母体はドイツ・スイス東亜伝道会です。その前身は「普及福音新教伝道会」で、1884年6月5日ワイマールで設立発足します。富坂の研究（堀、143-224頁）で明らかになったのは以下の点です。

この伝道会の神学的背景は、自由主義神学ないし宗教史学派でした。日本では「新神学」「自由キリスト教」と総称されています。その自由主義的な性格から、日本の宗教や習俗と融合し、さらに、その後の日本のプロテスタント・キリスト教に、

国家主義との妥協、伝統的な国民宗教感情との癒着へと導きます。自由キリスト教は、ドイツの場合と同じように、日本においても政教（政治と宗教）の協調、つまり天皇絶対主義体制との協調を主張します。この普及福音新教伝道会の卒業生は、政教の協調、国家君主への忠誠の意識を持っており、そのような形でキリスト教は日本に同化し、発展すると考えました。普及福音伝道会初代宣教師ウィルフリード・シュピンナーは、当時の日本の天皇制国家体制と密接な関係を持っていたといわれています。

1922年、普及福音新教伝道会は「東亜伝道会」（OAM）と改称し再出発するのですが、その基本的な姿勢は、政治的・神学的な「中立性」でした。1932年、「ヴィスバーデン神学宣言」が採択され、すべての神学の方向に完全な権利を保証すると宣言し、中立的立場を確認しています。中立性は、主体的判断を避けて「何も言わない」ことで体制に取り込まれる傾向があり、やがてナチスに迎合することになります。一見、違いを認めているようであるが実はそうではなく、全てを一つに強制的に同質化均等化していく全体主義へと向かっていくのです。

日本の教会も天皇絶対主義への屈服を招きます。1930年代から「日本的キリスト教」が起り、アジア侵略の加担と日中戦争への協力がなされるようになりました。伝道会卒業生の三並良は、日本でもナチス・ドイツのような教会と国家との協調関係が早く成立することを願い、日本精神とキリスト教との総合を期待しました。これは、日本基督教団の成立にかなり密接な関係を持っていたものと思われれます。当時、文部省に居たキリスト教関係担当者数名は、三並の友人で、しかも三並が発行した『信仰の真理』の読者でした。とくに教団の成立に重要な役割を果たした相原一郎介は、この雑誌を高く評価します。つまり、教団の成立は外圧的な国家権力に対する諸教会の隷属というだけでなく、三並のように、「わが帝国の道」を支える新しいキリスト教を目指す動きが教会内部にもあり、それが同じ意図を持つ文部省と協調し、教会指導部が自発的に新体制を精神的に支え推進する側面があったのです。「合同のとらえなおし」は、沖縄キリスト教団との「合同」問題の根がここにある点を認識したうえで議論されるべきではないでしょうか。このような歴史を自己吟味し、二度と戦争に協力しない教会の形成を日本の地で目指すべく1975年に創立されたのが富坂キリスト教センターでした。

つい最近まで、富坂の土地、建物、全ての財産はドイツ・スイスの所有と理解されていましたが、WCCのニューデリー神学宣言に基づいて、その関係が公的に解消され、宣教師がかつて購入したすべての財産を、日本の教会形成のために、

日本人キリスト者に無償でただで譲渡すると決断したのです。富坂はある意味で一見自立していたかにも見えますが、100年以上「被植民」状態だったこととなります。もしそうであるならば、富坂は、欧州の教会との間で被植民の立場にありながら、沖縄に対しては「植民者・権力」としてまったく無自覚・無意識のうちにいたということになるのでしょうか。

また、主権者としての責任や自覚をもって、アメリカ政府と対等な立場で交渉することで沖縄・ヤマトの状況を変えるべきところ、「〇〇が悪い」と批判することで、責任を転嫁してきたこととなります。無自覚に自らを植民者として第三者の立場においてきたのです。沖縄に基地があるということは、ヤマト人が沖縄人の土地を奪ってきた／いるということを意味します。欧州の教会との関係では被植民であったけれども、沖縄に対しては植民者という権力を振るっていた、そのことにまったく気付かない体質とはいったい何なのでしょう。天皇制国家や時の政権を「悪」に見立てて批判することで、つまり、悪や敵をある意味で「でっちあげる」ことで、自分たちは「良心的なヤマト人」であり、そうあるはずだ、そうありたい、とわたし自身認識しようとしてきたのです。もともと国境を越えて、ドイツの教会とスイスの教会がワイマールの町に集まり、神の国の宣教を目指しました。そして、「我らの国籍は天にあり」とのみ言葉のもと、「み国を来たせたまえ」の祈りによってトランスナショナルに宣教活動が開始したという、この聖書の原点にわたし自身がまず立ち返る必要があるのです。

イエスの宣教の中心メッセージは、「神の国は近づいた」、この言葉に表されています（マルコ1:15、ルカ10:9、マタイ10:7）。聖書学者の廣石望氏によれば、「近づく」「近づいた」（エーンギケン）はひとつには質的に異なるリアリティーがわたしたちの現実世界に直面している、その光の下で、世界はそこそこで、すでに変貌を遂げつつあるという意味として理解され、「現在」という時はイエスにとって、「既に未来に取り囲まれた時」となるということです。「み国を来たせたまえ」との祈りは、イエスの公生涯の全体を表しつつ、終わりの日に実現する神の支配の完成を祈り求めるものとして、終末的性格を表す祈りなのだ。わたしたちはみ国の到来を祈り求めつつ、その一翼を担うべく召されています。そのことを、日々の生活をとおして証しすることが求められており、そこから、祈りと実生活が切っても切れない関係にあることが明確に示されています。さらに、ルカ17:20-21に、

神の国は「あなたがたの中にある／あなた方の手の届く範囲に／あなた方の経験の中にある」（訳：廣石望）とあります。神の力は、わたしたちの手の届く範囲に、つまり、人間の経験世界の中で見出される具体的なものであって、抽象的理論的に理解されるべきものではないと指摘されている。神の国という新しい現実が、それまで伝統的で絶対とされていた祭儀や社会の規範、システムを相対化する自己批判的な視座を人々に促しました。主イエスは、当時の伝統的な家父長制社会を離れ、オールタナティブな共同体を生きるために神の国の新しい現実に応答しつつ、新しく生きようとされたのです（廣石、30-74頁）。この主に信従する私たちもそのように生きることが求められているのでしょう。

主イエスは譬のなかで、様々な日常の経験を取り上げて、聴く者がその日常の経験を新しく理解するよう求めました。そうして、神の国がいかにして人間の経験の中に到来するかを語ったのではないのでしょうか。「麦と毒麦」（マタイ 13：24-30）の譬は、天の国、神の支配について語っています。当時ユダヤは、ローマ帝国の支配下にありました。約一千年もの間、ユダヤは常に外国の国々、異教の人々の支配を受け続けてきた。当時ユダヤ人たちが期待した「神の支配」とは、異邦人や異教徒による支配を打ち破る力であり、民を具体的に救い出す力でした。相手を根こそぎ焼き尽くし滅ぼすことこそが神の支配の現れ、それこそが天の国だと考えたのです。「わたしたちが行って、毒麦を抜き集めましょうか」との言葉の背景にはそのことがあったと思われます。それに対して、主人は、「いや」と答えます（佐藤研訳「それは、いけない」）。なぜなら、「毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない」からだ。

「ヤマト人は醜い」との言葉は事実です。沖縄、アイヌの人々、足元のヤマトで、在日、様々なマイノリティの人々から同じ言葉を吐かれても仕方がない立ち位置にいます。饒平名長秀先生はそんなわたしたちに「せめて良いヤマト人であれ」（第1回研修会）といわれました。悪や敵をでっちあげ、政府や国家のみを悪とするのではなく、またそれゆえに、自分を「良いヤマト人」と自負するのでもなく、自分のなかの毒素（石牟礼道子は生前「1907年チッソ水俣工場が稼働した時から日本人は世界の毒素になった」と繰り返し語っていた）を、自分たちの悪い部分を少なくせよ、ということではないか。いまのような国家や体制を支えているのは主権者であるわたしなのです。この経験から、自分自身が毒麦にならないよう、自分の中にある良い麦を育てよう、そして少しでも毒麦があるならばそれをな

くしていくように自己吟味を呼びかけられているように思います。マイノリティを「支援する」という上から目線ではなく、マジョリティが当事者としてこの差別や偏見を生み出す文化や構造に対していかに抗うかが問われています。一人ひとりが自己決定権をもち、それを互いに認め合う社会（神の国）。「我らの国籍は天にあり」。み国を来たせたまえとの祈りに立つ姿勢が大切です。

先日、富坂の研究会で、ドイツでは歴史教育だけでなく、政治教育も熱心に行われているとききました。日本では、政治的中立、左右いずれにも偏らないことが良識といわれてきました。しかし、良識とは、本来、距離を置いて物事をみるということであり、物事に対してコミットしない無責任な態度、自分自身を無責任な地位、ポジションに置く「傍観者」とは異なるのです。表面的な「公平さ」に逃げ込むのではなく、自分の言論が好むと好まざるとにかかわらず、党派性をもっているということを自覚すること。そのうえで、党派性をもっているということを自覚しつつ、党派的な認識の偏りを自己吟味していく。これが現代における良識というものの特徴のひとつではないでしょうか。政治とは、政党や選挙だけではなく本来もっと幅広い日常を指します。ある集団のなかで生活していくうえで、話し合っ何かを決めたり、必要なルールをつくったりすることがすでに政治の一步と考えられます。学校のクラスもルームシェアも政治の場となり得る。政治教育は、弱くされ貧しくされている人たち一人ひとりの利益と必要のためのものであって、中立ではない（木戸、60-65頁）。ましてやキリスト信仰を自己吟味する神学それ自体の中立などあり得ないのです。

18歳の学生たちに、沖縄戦の映像、沖縄の歴史と現在の状況を伝える機会がありますが、その多くはなぜこのような差別、抑圧がいまも続くのかと不条理で不正義な現実に対して驚きと怒りの反応を率直に示します。歴史を学び、いま実際に起きている事実を知ること。無知・無関心は罪です。主権者はわたしであり、あなたである。一人ひとりの主体的な判断と決断、行動が社会を確実に変えていくのだ、と伝えますと、「つぎは必ず投票に行きます」と多くの学生たちはいます。でもそれは、選挙の時だけの事柄ではない。日々の生活のなかで足元の倫理的な諸課題を議論し、個々人が応答責任をもつことが大切な政治参加です。自律的で倫理的な個・自己の確立をはじめ、学校、地域、教会、新たなコミュニティのなかで人を育てていくことです。いま富坂では、経済、教育、食、エネルギーなどの自立をめざし、21世紀型の共同体を地域ごとに形成する取り組みの実際に

ついて共同研究していますが、そこに教会が他宗教とともにどのような立ち位置でコミットし得るのが今後の課題です。

わたしは、日本の近代国家の功罪、近代教育の負の側面から「醜いヤマト人」をこの間考えてきましたが、同時に別の視座も今回「応答」を言葉化するなかで与えられました。すなわち、中世・近世の大阪に、含翠堂、懐徳堂という、町の人が共同出資して建てた学校や私塾が存在していたことを最近知りました。これらは近代化の波と共にすべて破壊されますが、封建制のタテの身分制度の時代にあって、ヨコの水平の関係を大切にし、人間の自立、自由を訴え、人として何がより善く生きることなのか、「善」を相対的に探究した学校です。そこにおいて、ここでの「善」とは生命力の表現としての活動を指すようです。国家や君主に依存しない自主独立の道です。大阪には当時、商人、職人が90パーセント以上いた。京都は朝廷の支配、江戸は武士階級の支配下にある。それらの場所からの避難所・隙間にあった大阪に共同体の読書会が生まれたのです。含翠堂から懐徳堂へ。善は庶民の苦難を軽減するとの思想から、ディアコニア的な救済募金や相互扶助の共同体が生まれました。誠実と信頼を大切に、民衆が王政に先行するというこの思想は、天皇による国家創造、神道の神話はすべて虚構であり、偽造であることをこの時に既に見抜いていたというのです。

中国朱子学や朝鮮朱子学とは異なり、日本の文脈で朱子学を独自に解釈しなおした伊藤仁斎のこのような思想は、一言でいえば「自己批判」でした。仁斎は、普遍的に人間に与えられている同情心と善を実現する能力を人は持っていると確信し、対等で自由かつ解放的な対話を大切にしました（ナジタ、44頁以下）。近代以前の日本では非中央集権的支配が千年以上も続いていたのです。日本国を近代以降だけで一括りにとらえるのではなく、水戸学、ヤスクニ思想と対極の文化や価値が18、19世紀の大阪にあったことを心に留めたいと思います。わたし自身がヤマト人であると同時に、この大阪という地域、町に生まれ育った大阪人であることをいま一度捉え直したいのです。ヤマトと沖縄の二項対立構造はあるとしても、その視点だけで問題の本質を解決することはできないのではないのでしょうか。近代化の波に埋もれた歴史を、アジアの文脈や見過ごされてきた歴史、文化の広い視座においていまいちど深く掘り下げて問うことのなかに、ヤマト人の植民地主義に象徴される「醜」を乗り越える糸口があるのではないかと。非人間化である植民地主義からの解放、脱出は、失われた人間性を回復し、人間が人間とし

て生きる権利を取り戻すという意味において、キリストの福音に立つ宣教の今日の課題といえるでしょう。これは富坂の、わたし自身の今後の研究課題でもあります。

沖縄で起きている事件はヤマトの問題ですし、ヤマトの問題はヤマト自身が解決せねばなりません。公平・正義を求め、基地を引き取るべく声を挙げていく教会をヤマトで形成する。紛れもなく醜いヤマト人であることを意識すると同時に、対等になりきれない関係性を乗り越えるために、そして真の意味での「共同」の研修を、イコールパートナーシップを目指すために、ヤマトの問題を自分たちが責任をもって解決していくべく、自主的な訓練・修練が必要なのです。富坂センターが共同研修会からこの十年のあいだ突きつけられている研修課題です。沖宣研との共同研修による学びと出会いを大切にしつつも、ヤマトが沖縄にいつまでも依存せず、真に自立するための訓練機関として、「富坂プレディガーズセミナー」(牧師・信徒の指導者養成講座)を2022年から準備しています。1982年から富坂で大切にしたいと願ってきた牧師研修の基本は、「神のみを畏れ、世の権力者を恐れないこと＝善を行うこと」(ロマ13:3)でした。神に仕えることは、小さくされ、弱くされている人々に仕えること(ディアコニア)です。これこそが聖書の示す真の権威です。沖縄人に痛みを押し付け、上から目線で寛容を求めることは正反対の思想と生き方がここにあります。

阿波根昌鴻さんの言葉を紹介します。

「ともに平等に生きるという肝心の生き方を忘れている人がおるように思いますね。だから・・・生活の場でも平和でなければ本当の平和は実現しない。(略)何か特別なことをすることが平和運動ではない。悪いことだけはしない、生活の場から平和をつくり出していく、これが基本である」(阿波根、187頁)。

「悪いことだけはしない」。いま置かれている場所で、各自が内側の毒素を減らし、関係や信頼を取り戻す。足元の課題を誠実に担い、諦めずに平和を祈り求め叫び続ける。お互いに祈り合い、助け合って教会を建て上げる。そのときに、本来減んでも仕方がないヤマトはいつの日か再生するのだと信じたい。もともと平和の島、津梁の国だった沖縄が平和でなければ、東アジアも韓半島も日本も平和ではないのです。二年に一度の共同研修が富坂にとって、わたしにとって大切なのは、そのためです。

「醜いやマト人」との言葉を心に刻み付けつつも、いつの日か必ずこの言葉を返上する者でありたい。そのためにも神のみを畏れ、神のみを賛美し、祈りつつ日常の足元の取り組みに力を尽くす者とされたいと願ってやみません。Ω

〈参考文献〉

- ・「沖宣研・富坂センター共同研修会第1回～4回講演録」（『富坂キリスト教センター紀要』第4号、6号、8号、10号所収、2014年、16年、18年、20年）。
- ・『旧沖繩キリスト教団 第二世代牧師懇談会会議録』がじまる印刷、2016年。
- ・石田学「怒りと報復から和解へ…平和主義への道程—聖書解釈の可能性—」（『戦争と平和主義—エキュメニズムが目指すところ』富坂キリスト教センター編、いのちのことは社、2023年。所収）。
- ・廣石望『信仰と経験—イエスと＜神の王国＞の福音』新教出版社、2011年。
- ・堀光男『日本のプロテスタントイズムとドイツの伝道』（『日本におけるドイツ—ドイツ宣教史—二五年』新教出版社、2010年。所収）。
- ・木戸衛一『若者が変えるドイツの政治』あけび書房、2022年。
- ・池明観『破局の時代に生きる信仰』新教出版社、1985年。
- ・テツオ・ナジタ『懐徳堂—18世紀日本の「徳」の諸相』岩波書店、1992年。
- ・阿波根昌鴻『命こそ宝 沖繩反戦の心』岩波書店、1992年。
- ・岡田仁「ディアコニア（愛の奉仕）について」（『行き詰まりの先にあるもの—ディアコニアの現場から—』富坂キリスト教センター編、いのちのことは社、2014年。所収）。